

世界の首都「北京」の都市社会学

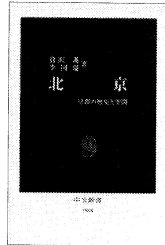
田辺義明

「私事からの書き出しで恐縮だが、かつて評者が新婚生活を送ったのは北京。いまやその街はオリンピックを間近に控えて、「世界の首都」になろうとしている。この北京という都市を日中両国の社会学者が共同考察した。『北京——皇都の歴史と空間』が本書タイトルである。異国の都（みやこ）を論じるときには必ずそうであるように、地理学・工学的構造の概略から始まる。北京が典型的な城塞都市であったことは誰にも明らかで、それは本書にも端的に述べられている。中国語で都市を「城市」と記すのも城塞に起源がある。ここを一步出たならば農地あるいは荒野である。それらのただなかに聳える北京をめぐって社会学の下位体系である「都市社会学」は展開されて行く。

北京は中国の政治・文化の中心だが、そこにはいつも人を驚かせる怪物都市の顔がある。万里の長城・故宮に始まって、かつての十大建築、さらに現代のオリンピック関連施設に到るまで、まさに威容と風格に満たされた都市である。その一方で胡同（フートン）と呼ばれる横丁や、四合院の屋敷町、そして外来農民工の居住区などに、庶民は息づいている。またも手前事だが、評者は帰国後に日本のある大学で「途上国と都市」研究室を預かって、まったくの「北京論」を講じていた時期がある。それは二〇〇三年からのことであつたので、この頃すでに中国が果たして「途上国」であつたかはともかく、北京とは縁が切れない。そのような関心から本書を開いた。

著者の両位を紹介すると、日本の倉沢

倉沢進・李国慶著
北京——皇都の歴史と空間

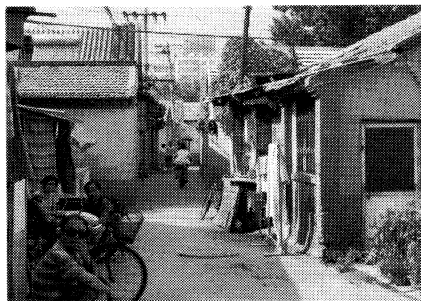


新書判 288頁
中央公論新社
[882円]

進教授は都市社会学の領域における権威で、また中国の李国慶教授は新進気鋭の農村社会学・比較社会学者としてともに知られる。もともと李国慶教授は「ちやきちやきの北京子」（二二六頁）であるという。倉沢進東京都立大学名誉教授も、中国社会科学院の李国慶教授も日本流の都市社会学を研究して来た。とはいっても、日本の都市社会学はそれ自体、アメリカ都市社会学とくに「シカゴ学派」の影響下にあつたので、まったくのオリジナル手法によるものではない。本書ではその「モノグラフ」と呼ばれる対象個別記述の方法で、中国における首都の位置づけという特殊性論と、都市・農村の戸籍制度の違いなどの中国社会一般論が同



スモッグに霞む建国路（2007年8月。写真はいづれも評者撮影）



北京の胡同（2004年8月）

時に説明されているので、「北京を知らない都市社会学徒」にも「都市社会学に慣れぬ北京通」にもそれぞれが理解しやすいようになっていく。

もともと「社会学」という独立した学問は、人間関係や集団生活を研究対象として固有の理念と方法論を持つ。領域は経済・政治・心理といった他の社会科学諸分野と重なるが、あくまでも人間の相互行為（interaction）がいかに作用し、「階級・階層」というような社会構造と、「官

僚制」などの制度に関心を寄せる。また独自に、家族・コミュニティ（地域・社区）・ジェンダー（性差）など個別領域も設定している。そこでは日常生活を構成する様々な要素とその結果を、科学として記述分析するのが常道とされる。そこでコミュニティとしては村落・町内会から地方や国家、さらには国家群関係までもが対象とされる。この社会学があくまで「も独立科学であることを念頭に置かれた。本書もその立場から執筆されている。

ちなみに中国でも譚嗣同の時代（一九世紀）には社会学一般を総称して「社会学」と呼んでいた（譚嗣同『仁学』西順蔵ほか訳注、岩波文庫）。

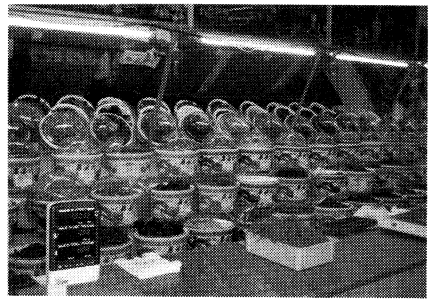
日本の社会学における中

国研究は、戦前における故福武直教授ほかによる諸業績や、また必ずしも社会学のフレームワークに準拠しないが満鉄調査部による農村研究など、膨大な実証的研究が遺されている。空白ののち、八〇年代になって中国側に社会学が復活し（胡喬木の指示によって、費孝通らが活動を再開したのち）、日本との共同研究プロジェクトも多く実施されている。最近では〇七年八月、北京において第三回アジア農村社会学会議（ARSA）が行われ、李国慶教授は開催国側委員として活躍した。

日本人にとって北京とはいかなる存在か。本書には「戦前の日本人」が魅せられた「北京秋天」（三頁）とある。馴染みのある表現だが、ちなみにこの言葉は画集から出たようで、日本洋画壇の鬼才である梅原龍三郎の名作「北京秋天」（東京国立近代美術館蔵）は、抗日戦争中の一九四一年制作・四二年発表である。日本人が惹かれたのはそのイメージ通りである。しかしいま北京の天空はクルマ・工場と地域暖房の排気、加えて黄砂によつ



中国社会科学院大楼 (2007年8月)



北京名物「六必居」の醬菜 (2004年8月)

て暗い。

またとくにビジネスマンにとって北京での活動は難題らしい。「商売がやりにくい」という。北京が対照される中国都市は上海である。二〇年間も上海で事業展開していた日本の知人が、〇七年夏に事業所を北京に開いた。そこにある多様な温度差（上海と北京、また日本と中国）は、中国ビジネスの最前線で活躍する薄田（すずきだ）雅人氏によるブログ (<http://blogs.yahoo.co.jp/mastarton>) に

で、いまの中国とくに北京を見たならばどのように理論づけるのであろうか。その『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（大塚久雄訳、岩波文庫）のように一書に括られはしないであろう。松下やトヨタといった日本の大資本が存分に、中国において企業活動を展開しているからといって、一部の日本人経済学者のように中国全体が「資本主義化しつつある」と決めつけられるのであろうか。それら外資企業を招き込んだのは中

現れていて面白い。北京は役人の街、上海は商人の街ということだが、東京と大阪以上に違うようだ。「官僚制論」を生み出したドイツの社会学者マックス・ウェーバー（一八六四〜一九二〇年）が存命

国共産党そのものである。彼らが、自らの政権基盤にマイナスとなるような策を選ぶはずはない。実際に、李国慶教授の所属する中国社会科学院の民意調査でも「改革開放政策の受益者は？」の設問に、過半数が「党政治幹部」と答えている。評者に言わせれば、北京を動かしているのは、社会主義的官僚制功利主義である。とくに社会の内実をよく知らないで、北京を「よく見た」日本の知識人は、国際会議後の宴席などで、不用意にも中国側に「これだけ近代化したのですから、共産党体制はいつまで続きますか？」と質問して相手をたじろがせることがある。逆に東京でも会議のあと「これだけの日本ですが、帝政はまだ続くのですか？」と問われて日本人は慌てる。評者はどの社会制度も未来永劫とは考えないが、相互に首都の表層ばかり見ていると、誤解や曲解を生じやすいと言える。

さて中国の産業組織とコミュニティの理解に欠かせない「単位」の制度について、李国慶教授が育ったという建設部大院の詳細な解説がある。本書では従業

員丸抱えの職場組織は日本にもあるとしている。しかしそれは、かつての国鉄やこの一〇月に民営化された郵政事業などがその典型であって、すでに多くが解体されている。日本に「揺り籠から墓場まで」（原語はFrom the cradle to the graveyard、中国語は「生老病死」）の職場はもはや存在しないと見える。本書は組織論の書物ではないので、組織構造とそこでの生活には深入りしていないが、これにも相応な言及がなされている。そのような点については飯田哲也・坪井健共編著『現代中国の生活変動』（時潮社、〇七年三月）も併読されるとよい。

ここまで論評して来て、本書からなかなか読み解けないことがあった。それは李国慶教授の「農村社会学者」としての正面（側面ではない）である。これについては先のブログや自分の生活体験などを照らし合わせてみると、北京は「おおいなる田舎」と思えて来て、それで片付いてしまう。ちなみに李国慶教授は日本農村の研究のため一年間、長野県のエブソン工場で調査観察をして、のち慶応義

塾大学で博士学位を授与された。倉沢進教授は、都市社会学の重鎮として後進の指導にあたる立場ながら、なお旺盛な探究心を持って「北京」という化け物を、「風水」の解析までをして論じている。正陽門・天安門・紫禁城を基軸として、北京の建造物が風水のコンパスに基づいて配置されていることは有名であるが、その基軸の延長上にいま「北京オリンピックの競技場（通称、鳥の巣スタジアム）」も建設された。これも本書末尾に触れている。また李国慶教授はいままで生粋の北京人すなわち都会派として中国農村を論じて来たことが、その著作の多くに見て取れるのであるが、本書ではそれが徹底されて北京における外地人（地方人の存在がより際立つ。それは外地人である新疆出身の俄（にわ）か北京人を妻とした評者には、江戸っ子ならぬ北京子の氣質が痛くも感じ取れるのである。

結論的に本書で傑出しているのは意外にも、中国社会の重層構造論である。ここで詳述はできないが、北京のというよりは中国のそれである。どこにある、とい

うよりも文中の各所に散りばめられているので、読み通せばその概要が理解できるであろう。また巻頭に北京地図が収められているが、これは本文における地名の位置関係を示すものである。したがって旅行ガイドブックの類いとは異なるのであるが、北京を訪れたことのない読者には必要であるし、これからもより多くの日本人に北京を訪問してほしい。

ただ本書における二名の執筆者における属性の違いは、およそ三〇歳の年齢差ということではなく、観察視座の違いとなつて文中に微妙な齟齬を生み出している。というのも、街並みをホテル最上階から眺める（三頁）「私」と、単位に生まれ育ってきた「私」が混在するからである。しかしそこが北京前門にある老舗「六必居」の「醬菜（福神漬）」のように、クロスチェック的な旨みを醸造しているとも言える。

新書という形態で世に出たが、異色のコラボレーションによるこの企ては、北京プームの昨今において、日本人に知的な北京観を与えるに違いない。社会学者